

うごこみやき。



なるほどアイヌ文化トーク ソッコ de ソッコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソッコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ ケマコシネカムイ(キツネ)



イラスト/安田千夏

動物たちも冬の寒さに備える季節。愛くるしい仕草で有名なキツネも

ふっさふっさの毛皮に衣替えですね。昔からキツネの毛皮は上等なものとして交易品や防寒用の衣服等に、肉も食用として利用されてきたよね。キツネは、チロソヌフヤスマリ、シトゥムなど身近な動物として多くの名前前で呼ばれます。アイヌ民族博物館のヌササン(祭壇)に祀られるカムイ(神)のケマコシネカムイ(足の軽い神)もキツネのカムイ。キツネは多くの地域で猟

魚の守護神として敬われてきたんだよね。キツネは災害など危険な事態が迫ると「パウ、パウ」と鳴いて人間にいち早く知らせられる大切なカムイ。漁業が盛んだらた白老では、海が荒れたり、濃い霧がかかると方向がわからなくなつた時などにシトゥンベカムイやシラツキカムイと呼ばれるキツネの頭骨にイナウル(削り掛け=木幣)を巻いたカムイを携帯して安否を占つたこと。昭和三十年頃まで私の祖父もキツネの頭骨で占いをしていたんだって。叔母が言うには、

親戚が沖漁に出て帰ってこないの、神棚に安置してあつたシラツキカムイを自分の頭に寄せ、その頭骨の落ちた状態から「帰ってくる」と占つたら、翌日に船が無事に戻ってきたという話。

優子さん、カムイユカラ(神謡)などアイヌの口承文芸の中にもキツネの話って多いよね。



そうね。とりわけ有名なのは「キツネのチャランケ」かな。私の恩師 萱野茂先生(ひのしほ)が日本語に翻訳したお話がよく知られているけど、もともとはカムイユカラとして伝承されてきたみたい。鍋沢ねぶきさんというおばあさんが語られたカムイユカラのあらすじを紹介するね。

この支笏川(しすく)にのぼってきたサケは、人間が遡上させたものでも、増やしたものでもないのに、一匹のサケを食べたことで私は罰せられ、悪い言葉、黒い言葉を浴びせられるのか。サケというものは、石狩川の神、石狩川の河口の瀬を司る神、ピリピリノイエクルピリピリノイエマツという男女の神が呼び寄せて、それで来てくれているのだ。数が決められて川ごとに入ってきて、この支笏川にのぼってきたのがサケなのだ。人間が増やしたわけでもないサケを一匹食べたことで、私が罰せられるというのか」とキツネが人間にチャランケしているのを夢の中で聞いた人がいて、まったく人間が悪いのだということになり、人間たちは相談をしてキツネ神に謝罪をしたのです。

チャランケとは談判すること。人間に堂々と談判するキツネ、そしてその言い分を聞き入れて謝罪する人間たち——周囲の様々な動物をカムイとして敬い、世界の構成員として尊重していたアイヌの人々の世界観をよく表している素敵なお話です。

